

## 歴史史料から見た白山千蛇ヶ池雪溪

小川 弘 司 石川県白山自然保護センター

### Senjagaike snow patch that was written by historical records, Mt. Hakusan

Hiroshi OGAWA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

#### はじめに

千蛇ヶ池雪溪(写真1)は白山の山稜西側の標高2,570m付近に位置する多年性雪溪である。白山山頂部に唯一存在する多年性雪溪であり、その動態が過去から現在までどのように変化しているかは地球温暖化等気候変動を知る上でも重要である。筆者らはこの雪溪の越年規模(面積)について、1981年以降モニタリングしており、また、より過去の越年規模を写真などから明らかにしている(伊藤・小川, 2003; 小川, 2004; 小川・伊藤, 2007; 2016)。

白山は信仰の山として崇められ、山頂で発見された遺物(國學院大學考古学資料館・白山山頂学術調査団編, 1988)などから平安期には信仰登山が始まったと考えられる。江戸期には武士や文人による登山も行われ、登山の記録が紀行文などとして残されており、当時の白山山頂部の様子をうかがい知ることができる。

これら史料の中に千蛇ヶ池雪溪がどのようにとらえられていたか大変興味深い。本稿では、過去の歴史史料から千蛇ヶ池雪溪がどのようにとらえられてきたかを報告する。

#### 史料の収集

白山信仰に関する史料は数多く残されているが、その中から白山の紀行文あるいは地誌や登山ガイドなどにあたる史料を収集し、千蛇ヶ池雪溪に関することが記載された部分を抜き出し整理をした(表1)。

抜き出した内容で、千蛇ヶ池雪溪を指す部分については下線で示した。具体的には千蛇ヶ池以外に、千歳谷、千歳ノ池などである。千蛇ヶ池は現在の千才谷の最上流部にあたり、それが千歳谷と呼ばれ、その最上流部の雪溪のある部分を含め、単に千歳谷



写真1 白山千蛇ヶ池雪溪(2017年8月13日撮影)

あるいは千歳ノ池と呼ばれていた。

白山山頂部には白山の噴火活動に伴う火口跡がいくつも残されており(守屋, 1984)、そこに水がたまり池となっている。千蛇ヶ池雪溪もそのひとつであり、周囲にも翠ヶ池や紺屋ヶ池といった池がある。

記載に当たっては縦書きのものを横書きとし、原則として出典文献に記されたとおりに抜き出しをした。このため、底本でなく翻刻・校訂されたものもそのとおりに記載している。ただし一部は文中に余白を設けるなど読みやすく整えた。

また、紀行文については実際に千蛇ヶ池を訪れた日がいつなのかわかるものは可能限り整理した。

表中の年代はその文献の発行年を記したが、発行年が不明でも白山への登山時期が明らかな場合はその登山時期をあてた。

#### 千蛇ヶ池雪溪の記載内容

収集された文献は江戸期後期、明治期を中心に37点を集めることができた。

表1 千蛇ヶ池雪渓が記載された史料

No.	年代	書名	著者等	記載内容	千蛇ヶ池 訪問日(旧暦)	千蛇ヶ池 訪問日(新暦)	出典
1	1163年(長寛元年) 1439年(永享11年)写	白山之記	隆嚴?	雪積未曾消滅、是名千歳谷			吉野谷村史編纂専門委員会編(2000) 吉野谷村史史料編前近代、石川県吉野谷村、95-103.
2	1509年(永正6年)写	白山禪頂私記	勝慶	千歳ノ池ノ寒水ハキユルコトノウシテ、自ら龍蛇ヲ伏シ、色々ノ草木蓬萊神仙ノ良業ナリ。			石川県図書館協会(1971)「白山比咩神社文獻集」復刻、113-128.
3	18世紀末～ 19世紀初頭	白山史圖解	金子有斐	宿雪三四町、自古昔不消釋、故有千歳之名、進香人道於其上、按地形、大汝與於本弥左岐之山脚成院、扶壑谷逶迤、而層水積雪光實于其内、其上平坦者也、山之僧曰、自是西下七八町、而斜視千歳谷之水口積雪崩跌者十丈許、恰如削成、光滑映日如銀、其下有洞穴、噴水如崩雲、其聲若雷云、然則積雪下有溪流者可知也、			写本、石川県立図書館所蔵
4	18世紀末～ 19世紀初頭	白嶽圖解	金子有斐	千歳池ハ池トハ不見三四町ホト雪ノ不消所有リ 上ヲ往來スル路有リ此所ノ地勢ヲ見ルニ大御前ノ尾サキト越南地ノ尾サキト打合フ所ニテ自然ト谷アイ深クキレタル所ヘ雪ノ積リテ平地トナリシ様ニ見ユ 雪ノ下タニ池ノ有ル無シハ不可知 東ノ方寶藏ノ下ヨリ千歳池ノ水口マテハ八九町モ可有 平泉寺ノ山廻リノ僧ノ話ヲ聽ニ往來ノ西ノ方千歳池ノ水口ノ方ヘ下リテ見レハ甚タ險阻ナリ十町ハカリ下リテ千歳池ノ水口ノ所ヲ横ヨリ見ルニ雪ノ欠ケ口十丈ハカリ見ユ 其下ニ大ナル雪ノ洞穴有リテ水ヲ噴出スコト瀧ノ如其響キ地ニ震フト云然レバ雪ノ下タニ池有ト可云			写本、石川県立図書館所蔵
5	1816年(文化13年)	越前国名蹟考	井上翼章	千歳か池 又千蛇か池ともみとり池とも云 ○千歳か池とて神代より消ぬ雪、今も方二百間ばかりの間にうつく高く池の水は見えず雪の中より細く流れ出る水は湯本川へ落るなり 此外ここかしこ消残りの雪多し 此あたりは草木もなくさながら深冬のごとし 白山紀行(野路汝謙) ○千蛇万蛇か池といふあり此池のこほり常にしもとけす 記雁仮記 三才園会伝絶頂有池名美止利池是非池極雪略解後瀧水也 ○名所方角抄云山頂に千蛇か池とて有之と云々みとりの池共云ふ			福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会共編(1958)福井県郷土叢書第五輯 越前国名蹟考、福井県郷土誌懇談会、920p.
6	1819年(文政2年)	白山行	湖棹、芳雨	恐るべし千蛇が池の夏水 冷つく汗に浮む念佛 雨棹			久保信一著古川脩編(1991)白山私攷、山路書房、41-59.
7	1822年(文政5年)	白山草木志下	畔田伴存	御宝藏ト云岩ヲ道ヨリ右ニ見テ行ハ千蛇か池ト云アリ 即ミトリノ池ナリ其圖下ノ如シ 千蛇か池ハ歴年ノ残雪積リテ水(氷)ノ如シ 其池ノ上ヲ通ルナリ 水ハナシ 俗説ニ此千蛇か池ニ千蛇アリ 若シ池上ノ水解スレハ其蛇出ル故ニ其時御宝藏ノ岩ヲ落シ入ルト云ヒカコト□リ	文政5年6月下旬 から7月上旬	1822年7月下旬 から8月上旬	写本、金沢市玉川図書館所蔵
8	1830年(文政13年)	白山全上記	加賀正教	又緑ヶ池方二百間許ノ間ニ凍雪満テリ北ノ方ニ池水ノ細ク流れ出ル所アリ 此水落下テ不動ノ滝トナリ其末湯ノ谷川ニ落テ遂ニハ加州手取川ト云大河ト成ルト云 池ノ雪ハ神代ヨリノ消ルフナク数千歳ヲ経ルカ故ニ千歳ヶ池ト云 又大師千蛇ヲ此池ヘ對シ置レタル故ニ千蛇ヶ池ト云トナリ 雪ノ上ヲ行フ三町斗堅ク凍リタレバ杖ヲ以テ衝ク□少ク傷ツクノミ也	文政13年7月22日	1830年9月8日	写本、西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵
9	1831年(天保2年)	白山道之栞	此君園琴路	千歳が池の雪の上を三丁斗凍雪満々たり。北の方に池有。細く流れ出る所あり。この水落下って不動の滝となり、その末湯の谷川へ落、ついに加賀の手取川といふ大河となるといへり。池の雪にいしえより数千歳を経る故千歳が池と云。又大師蛇を封じ置たまふ故斯云とも。又一名緑がとも云。	天保2年7月2日	1831年8月9日	久保信一編・校訂(1976)白山紀行-近世の白山登山-、白山問題研究会、39-44.
10	1832年(天保3年) <sup>1)</sup>	白山遊覽圖記卷之一 白山遊覽圖記卷之二	金子有斐	南下到千歳谷。涉堆雪三町程。大旱久淋。未嘗消釋。故有是名有。千歳谷 亦稱千蛇池。疑千歳谷之轉訛。形勢載紀行。土人曰。下西南七八町許。斜視谷口。堆雪崩頽。其高數十丈。陽輪照之。則光輝映徹。晶晶如銀壁。下作一大口。噴水如崩雲。其聲殷殷如雷。下流歷牛首村。入于粟生川。	天明5年6月27日	1785年8月1日	日置謙校訂(1933)白山詣、国幣中社白山比咩神社、1-40.
11	1833年(天保4年)	続白山紀行	高田保浄	方二百間許之間、雪うつ高く、池の水は見えず、年により池中の水やはらく時は、上なる雪にひひれ出来る事有といふ、(中略)千歳池とは、池の雪神代より消えることなく、数千歳を経る故に名付、千蛇とは、大師千蛇を比池へ封じ起給ふによりて名を得たり、	天保4年7月	1833年8月中旬 ～9月中旬	加藤惣吉編(1965)續白山紀行附牛首長加藤氏家集、石川県石川郡白峰村役場。
12	1841年(天保12年)	白山紀行	小原 益 (小原氏益)	夫より少し下りて千蛇ヶ池なり。大師千蛇の蛇を封じ籠給ひし池也といふ。夏日も此池水雪満封して、此池の上をわたりて往來す。池と覺しき所の大四五十間に過す。	文化10年7月25日	1813年8月20日	日置謙校訂(1933)白山詣、国幣中社白山比咩神社、41-56.
13	1847年(弘化4年)	白山行程記	天友友諒	千蛇ヶ池、又千歳ヶ池とも緑ヶ池とも、方二百間許の雪うつ高く、池の水ハ見えず、年に方池中の水やはらく時ハ、上なる雪にひひれ出来る事有といふ、雪の下方細く流れ出る水路で湯本川となる、加賀手取川の源、此池也。千歳ヶ池とハ、古神代古消る事なく数(千)年を歴たる故、名付しと見ゆ、千蛇ヶ池とハ、大師千蛇を此池江封し置給ふによりて也、右、雪の上を行事三町斗り、朝の内ハ堅ク杖を衝けとも僅傷のミ也。	弘化3年6月23日	1846年8月14日	写本、石川県立図書館所蔵
14	1850年(嘉永3年)	白岳遊記	金子盤蝸稿	千歳池ノ雪上ヲ渡リ室戸ヘ下リ宿ス	嘉永3年7月28日	1850年9月4日	古川脩翻刻(1990)「白岳遊記」金子盤蝸稿、山路の会、
15	1851年(嘉永4年)	白山禪定日記	不明	図面：千蛇が池六月土用ノ中ニテモ雪消ヘス(中略)夫より千蛇ヶ池水の上をあゆ□リ	嘉永4年6月19日	1851年7月19日	写本、石川県立歴史博物館所蔵
16	1860年(万延元年)	白山紀行	後藤雪袋	中にも千歳池といふは俗に千蛇の池といふ。往年千蛇を封じこめたれば此名ありとぞ。雪堆くして三伏にもきえず。其上を行。神代の雪とよみけん。	万延元年6月	1860年7月中旬 ～8月中旬	久保信一著古川脩編(1991)白山私攷、山路書房、67-71.
17	1862年(文久2年)	又寝の夢物がたり	高林景寛	少し平なる所に雪白くみゆる。千歳池の上なりといふ。いつ世に積もれる雪の消る時なく、池なることと神ならは誰か知るべき。されど汀めく所は、雪解てげにも池なることとゆるくみゆると語る者ありけり。	文久2年6月19日	1862年7月15日	久保信一著古川脩編(1991)白山私攷、山路書房、72-77.
18	1868年～1886年 (明治)	越前国松山嶽記	不明	山上ニ大デアリ千蛇池ト名ツリ方三百間許水雪積唯水ヲ見ス其池小池数箇瀧リテ飛瀑トナル			写本、白山比咩神社所蔵
19	1884年(明治17年)	白山調査記	石川県職員	西ニ低レテ千歳谷アリ千年ノ宿雪積ミテ平地ヲナス、(中略)名翠池ハ四アリ大ナルモノヲ千蛇池又普光院ト云フ、水清冽其ノ深測ルベカラス周囲百五十間下流中ノ川ニ注グ、			古川脩編(1991)明治十七年「白山調査記」明治三十二年「白山行」、山路書房、44p.
20	1884年(明治17年)	白山調査記	不明	西ニ低レテ千歳谷アリ千年ノ宿雪積ミテ平地ヲナス、數十丈ノ下ニ水口アリ龍尾ト名ツク下流湯谷川ニ注グ、名翠池ハ四アリ大ナルモノヲ千蛇池又普光院ト云フ、			古川脩編(1991)明治十七年「白山調査記」明治三十二年「白山行」、山路書房、

小川：歴史史料から見た白山千蛇ヶ池雪溪

表1 千蛇ヶ池雪溪が記載された史料（続き）

No.	年代	書名	著者等	記載内容	千蛇ヶ池 訪問日（旧暦）	千蛇ヶ池 訪問日（新暦）	出典
21	1884年(明治17年)	登嶽紀事	横山政和	復下數歩、積雪皚々寒風襲人、跋涉數百歩方盡、乃白山記所謂千蛇谷、今訛爲千蛇池、池面堅氷、終古不融、積雪其上、人恒涉之、無見池水者、所以有千蛇谷乃名、經與富士峯萬年雪同日之談也、雪下水口奔激、下而爲千仞瀑布、又名千丈瀑布、今所歷則池上、而瀑布遙在下方、不可見也		1884年7月22日	写本、白山比咩神社所蔵
22	1886年(明治19年)	白峰乃苞	化々道人	手取川ハ。二源アリ。一ハ千歳池ヨリ出テ。多クノ谷川ヲ合セ。市ノ瀬。牛首ナトノ村ヲスグ。(中略)千歳ノ池ノ。雪ヲ賦立テ果シラス。平樂ノ川モ。手ニムスブ。千歳ノ谷ノ。雪ノ滴リフリツモル。雪ノ絶セズ。千歳谷。是モ水ノ。原トイハマシ世ニ名高キ日耳曼ノライン河ノ源ヲ尋ヌルニモントカラ山ノ水原ニアリ。トイヘハ手取川ノ源ハ。コノ千歳谷ノ水原ニアリトイハシカ。コノ水原。六七月。四方山ノ雪消エシ頃ニ至リ。漸漸ニ。トケオチテ。手取ノ水源ヲシ。諸方ノ田地ヲウルホスナリ。		1886年8月19日	写本、石川県立歴史博物館所蔵
23	1888年(明治21年)	白山遊記	今川以昌	皎皎長留千歳雪。千丈之瀑千蛇池。(中略)而有千歳谷。俗呼曰千蛇我伊氣。(中略)千歳宿雪凝結而爲平地。其面積凡四町許。滿額白色。宛如冬光。		1888年8月7日	日置謙校訂(1933)白山詣。国幣中社白山比咩神社、121-164.
24	1890年(明治23年)	白山遊記	小杉復堂	左側谷底有水雪。廣袤可數百歩。又進谷底有水雪。祠堂云。雪處皆池。寒氣甚烈、水凍合遂爲氷雪。		1890年8月8日	「明治廿三年(一八九〇)白山遊記小杉復堂 明治廿九年(一八九六)登白山記村上珍休」発行年不詳、白山自然保護センター所蔵。
25	1890年(明治23年)	北陸遊記	穴戸昌	又其左は千歳谷にして千蛇の池あり、其中央を下りて兩岳の中間なる谷に出づ(千歳谷の続きなり)(中略)其方に向はずして直に千歳谷に下り千蛇ヶ池に至る、経年の残雪風の爲め恰も波濤をせし如く高低あり、此池経一丁もあるべく池に入り雪上を過ぎて中央に至れば噴口と覚しく下より積雪融解して大洞穴をなしたる所二所あり、其深さ約二丈許もあるべく其穴中又小穴数所あり、		1890年8月20日	古川脩翻刻(1991)穴戸昌著「北陸遊記」、山路書房。
26	1896年(明治29年)	登白山記	村上珍休	右轉出千歳谷。積雪凍合。千歳不消。所以得名也。其融釋而往者。湏漬成流。即湯谷川發源處也。		1896年9月1日	日置謙校訂(1933)白山詣。国幣中社白山比咩神社、165-169.
27	1897年(明治30年)	白山紀行	田中一次郎 ほか	千蛇ヶ池の積雪氷結せし上を渡り		1897年9月29日	森坂洋晴編(2010)白山山の旅明治大正篇、86-91.
28	1899年(明治32年)	白山行	木崎愛吉	今は世に經る千歳が池も、徒らに氷に鎖されてあり、坐る物すまじき血の池地獄、油地獄さては紺屋地獄など、雲のあなたに隔たりて、大汝峰(二の峰)はなほ五十町の奥にありとか。			古川脩編(1991)明治十七年「白山調査記」明治三十二年「白山行」、山路書房。
29	1903年(明治36年)	白山登山之記	米溪生	大汝と御前との間には、千秋の積雪を以て封ぜられたる千歳カ池			森坂洋晴編(2010)白山山の旅明治大正篇、117-124.
30	1907年(明治40年)	加賀白山登山	大平成	千歳池に至る、是れ大残雪の火口を嚴封せるものにて、經數町に亘り、全く水面を認めず、雨霖翁の「水池光散千年雪」とは即是ならん、一朝氷溶れば、千蛇横行すと稱し、或は千蛇ヶ池と名づく、而かも雪下水底漸く溶け、峽々の斷崖を急下し、日本一と自稱せる白水瀧の瀧水をなす、下には水の湛ふべき氷雪の上を履める等、餘り心地も善からねば「千蛇の頭はれぬ前に」など實は怖氣の戯言を吐きつゝ、早急之を渡り越し、六角地藏堂を經、四時四十分室堂に歸着す		1907年8月21日	森坂洋晴編(2010)白山山の旅明治大正篇、124-134.
31	1909年(明治42年)	頂上の偉觀	金澤師範学校教諭 M 生	唯千歳池だけは千秋の積雪を以て封ぜられ未だ曾て水面を見た者が無いのだ、この不思議な靈地から手取川の源は發して、室堂の附近では既に溪流をなして千歳谷を下り、千丈瀑を懸けてあるのである、(中略)我等はこれから千歳池の雪をふんで大汝に攀ぢ、一周して歸途に就いた、(中略)歸途の千歳谷の上には甚だ廣い面積に積雪が有つて、其上を這り下るもの實に愉快であつた		1909年7月24日	森坂洋晴編(2010)白山山の旅明治大正篇、144-167.
32	1909年(明治42年)	白山登山紀行	古瀬鶴之助	千蛇ヶ池は、凍雪之を塞ぎ、更に水を見ず、此雪上を歩し、室堂に歸り、喫飯休憩の後、歸途に就く		1909年8月11日	森坂洋晴編(2010)白山山の旅明治大正篇、139-143.
33	1911年(明治44年)	白山	加藤賢三	積雪皚々千古消えざる所あり、之を千歳谷(千蛇ヶ池とも稱す)とす、水下水ありと稱するも遽に信すべからず			加藤賢三(1911)白山、有聲館、210p.
34	1911年(明治44年)	白山登山案内	加藤賢三	積雪皚々千古消えざる所あり、之を千歳谷(千蛇ヶ池とも稱す)とす、水下水ありと稱するも遽に信すべからず			加藤賢三(1911)白山登山案内、有聲館、78p.
35	1916年(大正5年)	白山登山記	浅田与作	心休めて千蛇ヶ池へ降りて休まうと見渡せど、四方は雲にかつ、まれて、さすが中天にある心地、わづかに見ゆる千蛇ヶ池へ降りて雪を取り、砂糖まじえて食つた時の美味よ、千代万代にわたるべき。		1916年8月5日	小倉学(1982)信仰と民俗。佐藤文夫、162-169.
36	1931(昭和6年)	白山の傳説	白山振興會	千蛇ヶ池「白山麓所聞」泰澄開山の時、山中毒蛇多く、觀喜渴仰して諸方より登山する者、害せらるるを慮り、是を除かんと、千筋の蛇を捕へ、此池に封じ込め、萬年雪を以て蓋をなし、若し萬年雪の消えることあれば、くづれ落ちて雪の代りに、蓋をするやうに御寶座の大巖石を、其上に置いたといふ。			玉井敬泉編(1931)白山の伝説、白山振興會。
37	1935年(昭和10年)	白山連峰と溪谷	池上鋼他郎	千蛇ヶ池は最古の噴火口であり、往昔大蛇が住み山伏を苦しめたので、泰澄大師長蛇にいつて曰く、汝に木ノ種子を與へるにより久遠に池中に沈むべしと、大師その後雪を降し再び出づることなからしむるようになった。これ以来蛇は出なくなったので、萬年雪が全池を蓋ふてあるので先づ先づ安心である、こうしたことは大師の悲智圓滿を裏書せるものではなからう			池上鋼他郎(1935)白山連邦と溪谷。宇都宮書店、360p.

年代は文献の発行年を記したが、発行年が不明でも白山への登山時期が明らかな場合はその登山時期をあてた。記載内容中、千蛇ヶ池雪溪にあたる部分については下線で示す。千蛇ヶ池訪問日の旧暦から新暦への変換は、ウェブサイト (<http://koyomi.vis.ne.jp/i/19reki.cgi>) を利用した。

表中No.1の『白山之記』は、加賀馬場の縁起にあたり、白山信仰を知る重要史料である。

白山への登山道は石川県側、福井県側、岐阜県側の3方向から開拓され、その起点を加賀馬場(現在の白山白山比咩神社)、越前馬場(現在の平泉寺白山神社)、美濃馬場(現在の長滝白山神社)と呼び、

現在も白山信仰の拠点と位置付けられる。

その縁起の中に千蛇ヶ池雪溪は、「雪積未嘗消滅、是名千歳谷」とあり、これは「雪積りて未だ曾より消え滅びず。これを千歳谷と名づく」となる(吉野谷村史編纂専門委員会編、2000)。古くから千蛇ヶ池雪溪が白山山頂部で、常に雪が堆積した場所とし

て認識されていたことがわかる。

それは、「千歳が池とて神代より消ぬ雪、今も方二百間ばかりの間にうつ高く池の水は見えす（『越前国名蹟考』）」あるいは、「池ノ雪ハ神代ヨリメ消ルフナク数千歳ヲ経ルカ故ニ千歳ヶ池ト云（『白山全上記』）」など、以降のいずれの文献においても雪が堆積した場所として記され、当時の人々にとって特別な場所として白山山頂を特徴づけた。

その雪は解けずに毎年積み重なりそれが何千年も繰り返されているとして、この谷あるいは池の名称が千歳谷、千歳池となったことにつながっている。

表中の文献の中には『白山史圖解譜』、『白山草木志』など、千蛇ヶ池に着目した絵図が示されているものもある。『白山禅定日記』には、「千蛇ヶ池 六月土用ノ中ニテモ雪消ズ」として千蛇ヶ池が示されている（図1）。旧暦の六月の土用は新暦の7月下旬から8月上旬にあたり、いわゆる1年で最も暑さの厳しい時期にあたるがその時期にも雪は消えないとしている。

このように、千蛇ヶ池は池とは言ってもその湖面が見えることはなく、万年雪がある場所としておそらく何百年も前から認知されていたと考えられる。

また、現在の一般的呼称の千蛇ヶ池は、表中では『越前名蹟考』に最初に出てくる。これはのちの『白山草木志 下』に「俗説ニ此千蛇カ池ニ千蛇アリ 若シ池上ノ氷解スレハ其蛇出ル故ニ其時御宝蔵ノ岩ヲ落シ入ルト云ヒカコト□リ」とあり、千歳谷あるいは千歳池に対して、玉井（1957）が取りまとめた『白山の歴史と伝説』にあるように、千蛇ヶ池は白山を開山したとされる泰澄が山上で悪さをする千匹の蛇を捕らえ、この池に封じ込め万年雪を以て蓋をし、もし万年雪が解けて蛇が出るような時には、池の上部のお宝庫が崩れ落ちて池に蓋をするという、伝承が後に広まるにつれ、千蛇ヶ池がこの池の一般呼称になったと思われる。

今回の収集にあたり、実際に千蛇ヶ池を訪問した日が何日なのかを整理をした。これはこの多年性雪渓が過去に解けたり、あるいは雪渓が小さくなったりした年とその時期が判明できないかと考え、整理した。しかし、雪渓が小さかったあるいは湖面が見

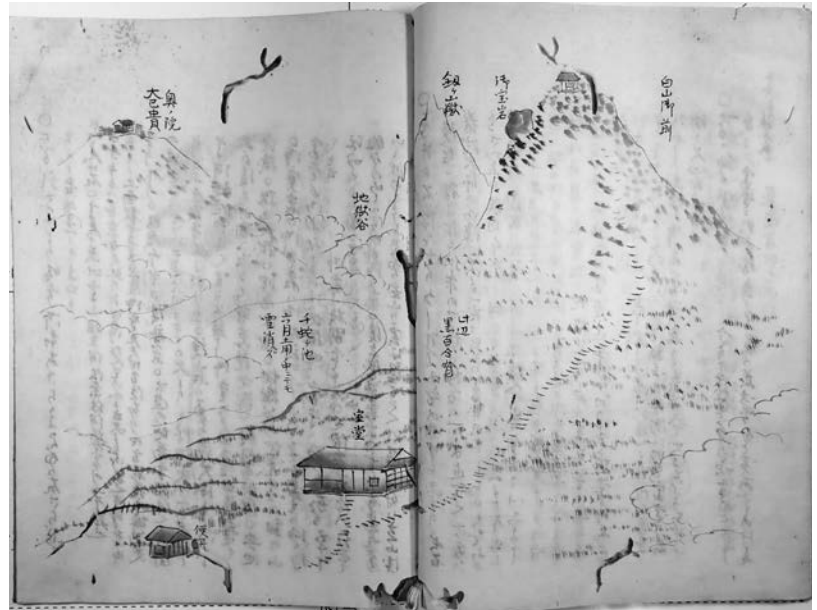


図1 『白山禅定日記』に記された千蛇ヶ池雪渓（石川県立歴史博物館所蔵）

えたなどの記載は見られなかった。一部雪渓に穴が開いたり水が噴き出したりしているという記載は見られたが（『白山史圖解譜』、『北陸游記』）、これは、現在の雪渓を見ても同様な形での雪渓の融解が観察され、このことが特別に雪渓の融解が進んだことを示しているとは言えない。

また、訪問日を見ると8月が一番多く次に7月、9月となっており、天候の安定したこの時期の記録が主となっている。多年性雪渓である千蛇ヶ池雪渓の場合、この時期にはまだ十分な積雪で覆われているのは通常の姿である。

降雪前の雪渓が最小となる10月頃に千蛇ヶ池を訪問した史料が残っていれば貴重であったがそれは見られなかった。実際に山頂の宿泊施設である室の管理者が常駐したのは7月中旬から9月上旬であり、必然的にもこの時期の記録が主体となっていると考えられる。

### おわりに

近年の千蛇ヶ池雪渓の推移を見ると8月であっても、一部に池ができることもしばしば観察されており、2017年の8月には比較的大きな池が現れた（写真1）。この8月に池が実際存在することは、1981年以降においても、12回確認（目視並びに伊藤文雄氏撮影写真による）されている。このことは史料からだけで断定することは難しいが、近年は過去に比べて雪渓自体が縮小傾向にあることを示唆していると

も考えられる。

千蛇ヶ池雪溪の長期的な変動を明らかにしていく上で、今後も継続してモニタリングをしていく必要がある。

### 謝 辞

本稿での史料の収集にあたり、石川県立歴史博物館並びに白山比咩神社には所蔵文献の閲覧に協力いただき、なおかつ石川県立歴史博物館には所蔵文献の掲載の許可をいただいた。また、伊藤文雄氏には過去の千蛇ヶ池雪溪の撮影写真を見せていただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

### 注

注 1) 発行年は著者が残した文献から天保三年と推測した。

『鶴村日記下編 (一)』

文政十三年六月廿四日 尤白山志と申てハ事重  
ニ候間、白山遊覧図志と題し、図一枚相添上  
申候

『鶴村日記下編 (二)』

天保二年十二月八日 朝長井へ行、白山遊覧図  
記序文頼申

天保三年一月廿五日 在江戸青地藏人殿へ書状  
到来、白山志正月十日相達、御用部屋中江早  
速相達申段申来候事

### 引用文献

- 伊藤文雄・小川弘司 (2003) 白山千蛇ヶ池雪溪の1981年以降の変動. 雪氷北信越第23号, 43.
- 金子有斐 (1978) 鶴村日記下編 (一). 石川県図書館協会, 308pp.
- 金子有斐 (1978) 鶴村日記下編 (二). 石川県図書館協会, 307pp.
- 國學院大學考古学資料館・白山山頂学術調査団編 (1988) 白山山頂学術調査. 95pp.
- 玉井敬泉 (1958) 白山の歴史と伝説. 玉井敬泉, 210pp.
- 守屋以智雄 (1984) 白山の火山地形. 金沢大学文学部地理学報告, No.1, 130-138.
- 小川弘司 (2004) 白山山頂部の雪の解明 - 千蛇ヶ池雪溪の変動. 雪氷防災研究講演会報文集, 独立行政法人防災科学技術研究所, 1-6.
- 小川弘司・伊藤文雄 (2007) 白山千蛇ヶ池雪溪の変動と気象との関係. 2007年度日本雪氷学会全国大会講演予稿集, 187.
- 小川弘司・伊藤文雄 (2016) 白山千蛇ヶ池雪溪の越年規模の経年変化. 雪氷北信越第36号, 32.
- 吉野谷村史編纂専門委員会編 (2000) 吉野谷村史史料編前近代. 石川県吉野谷村, 95-103.